

埋もれていた *The Nagasaki Express* のシェイクスピア

佐々木 隆

プロローグ

書誌研究の分野で基本的なことは現物の確認であることは言うまでもないことだ。特に現代のようにウェブ上で様々な情報が入手できるようになると、その情報の信用性や信憑性について十分な確認が必要となろう。その情報ソースがはっきりしないからだ。紙媒体（活字化された書誌）のいわゆる書誌はその作成者がひとつの権威付けとなるが、なお、現物の確認は不可欠のものだ。今回、先行研究の2行の記述から、現物の確認に至り、*The Nagasaki Express* に掲載されたシェイクスピアの記述はこれまでのどの書誌にも紹介されていないことがわかり、今回、報告することとした。

1 *The Nagasaki Express* について

The Nagasaki Express は1870年1月15日にポルトガル人フィロメノ・ブラガ(Filomeno Brage)が創刊した長崎で発行された4番目の英字新聞である。発行は毎週土曜である。創刊者ブラガは前年には神戸で*The Hiogo News*を発行していた。*The Nagasaki Express* は1874年5月まで続き、週刊の*The Rising Sun*に合併され、*The Rising Sun and Nagasaki Express*となる。*The Nagasaki Express*以前に長崎で発行された英字新聞は以下の通りである。

The Nagasaki Shipping List and Advertiser

1861年創刊。創刊者、A・W・ハンサード。

The Nagasaki Times

1868年頃創刊。F・ウォルシュ。

The Nagasaki Shipping List

1869年創刊。

英字新聞が発行される背景には外国人の人数が気になるところだ。

長崎の居留地外国人数は米人三八、独人二〇、ポルトガル人一三人、残りのほとんどが中国人といった構成だった。総数から見れば一〇年間でざっと五倍近く増えているが、欧米人の増加数は意外と少なかった。⁽¹⁾

また、*The Nagasaki Express*の目標・目的については以下の通りと紹介している。

開港以来新聞事業の育成地であった長崎において、本紙『ナガサキ・エクスプレス』の主たる目標・目的は、国際問題や帝国の利害に影響する問題に重点を置くよりも、地方紙としてぬきんであることであった⁽²⁾

この背景には *The Nagasaki Express* が創刊された翌年1月に *The Nagasaki Gazette* が創刊されるなど、他の新聞との差別化が必要であったようだ。

2 *The Nagasaki Express* に紹介されたシェイクスピア作品

The Nagasaki Express (No.112, 1872)に『ヴェニスの商人』と『冬物語』からの引用があることは、市河三喜・山口武美共編「日本シェイクスピア書誌」(1931-1932)、Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan* (1940)、河竹登志夫『比較演劇学』(1967)、高橋康也監修/佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』(別

卷1、1998)、川戸道昭『明治のシェイクスピア』(2004)と言った受容史をまとめたものでもその言及はない。また、これまでのシェイクスピア書誌には全く取り上げられていない文献である。これに触れているのは私見では柳田泉『明治初期の翻訳文学』(1935)と大島田人「明治期に於けるシェイクスピア」(1955)だけである。しかしその言及はわずか1、2行に過ぎない。柳田泉『明治初期の翻訳文学』(1935)では以下のように記述されている。

明治五年 長崎エキスプレス一二号に『ヴェニスの商人』及び『冬物語』よりの引用あり⁽³⁾

大島田人「明治期に於けるシェイクスピア」(1955)では以下のように記述されている。

また、明治五年「長崎エキスプレス」一二号にも「The Merchant of Venice」と「Winter's Tale」からの引用がある。⁽⁴⁾

大島田人による掲載号については実際には一二号ではなく、121号である。本文は縦書きで一二号と記しているが、21号は1870年6月4日の発行であるため、1872年発行のものと確認していくと、5月4日発行がVol.111 No.121に該当することが判明した。

該当号の*The Nagasaki Express*はペリカン社出版の北根豊監修『日本初期新聞全集』(第36巻)(複製本)に収録されている。該当の言及箇所は以下の通りである。少し長くなるがこれまでにほとんど紹介されていないので、全文を紹介する。

(Communicated by Shylock.)
"The process of Antonio's end."

MERCHANT OF VENICE

THERE are perhaps none of Shakespeare's minor characters more laughably individualized, and more adapted to the present occasion, than the professional peddler and incurable vagabond, Autolycus. None, could more aptly illustrate the poet's conception of the character, than the writer of the articles which appeared in the columns of the *Nagasaki Gazette* for some time past. His mendacious gibberish, vociferated with such an air of entire good faith and unctuous enthusiasm, at once proclaims him to be an aspirant to share the audacious humour of the above mentioned ballad singer: vide "The Winter's Tale," act IV, scene 3, part of which is quoted below.

Who can forget how Autolycus is introduced into the play, or his proclivities, and his particular part, down to his arrival at the sheepshearing feast where he appears singing a ditty in praise of his wares? The following colloquy, which occurs after some preliminary squabbling amongst the jealous maidens, will do to illustrate the likeness between the couple:—

CLOWN—What hast here? Ballads?

MOPSA—Pray now, buy some: I love a Ballad in print a'life: for then we are sure they are true.

AUTOLYCUS—Here's one to a very doleful tune, how a usurer's wife was brought to bed of twenty moneybags at a burden and

how she longed to eat adders' heads, and toads carbonadoed.

MOP—Is it true, think you?

AUT—Very true, and but a month old.

DORCAS—Bless me from marrying a usurer!

AUT—Here's the midwife's name to't, one Mistress Taleporter, and five or six honest wives that were present; why should I carry lies abroad?

MOP—Pray you now, buy it.

CLO—Come on, lay it by: and let's first see more Ballads; we'll buy the other things anon.

AUT—Here's another Ballad of a fish, that appeared upon the coast on Wednesday, the fourscore of April, forty thousand fathom above water, and sung this Ballad about the hard hearts, & c.

No more need be said to recall the particular scene, as it gives a clue and enables all to appreciate the rendering of the part now played before the public by the successor of Autolycus. ⁽⁵⁾

『冬物語』については第4幕第3場とあるが、手元の翻訳版では第4幕第4場となっている。全集により若干異なることもある。該当箇所を小田島訳で紹介しておきたい。

道化 なんだい、こりゃあ？歌か？

モプサ ねえ、どれか買って。あたし、印刷された歌って大好き。だって、活字になるぐらいだから、きっと本当にあった話だもの。

オートリカス これなんかどうですか、とっても悲しいメロディーで、高利貸しの女房のことを歌ったものです。その女房

が一度のお土産で金袋を二十も産んだとか、マムシの頭やガ
マガエルのシチューを食べたがったという話です。

モブサ それ、実話？

オートリカス 実話ですとも、それをつい一月前のことです。

ドーカス ああ、いやだ、高利貸しのおかみさんにだけはなり
たくないわ！

オートリカス そのときの産婆さんの名前までわかりますよ、
ミセス・オシャベリーっていうんです。それからその場に
わせた正直なおかみさんも、五人、六人わかってます。あた
しが嘘っぱちの作り話など売り歩くもんですか。

モブサ ねえ、買ってよ、これ。

道化 じゃあこれはこっちにとつといて、ほかの歌も見ようよ、
いますぐいろんなものを買ってやるからね。

オートリカス これは魚の歌です、四月八十日の水曜日に、海
抜四万尋の高さの浜に浮きあがり、そこで歌ったのがこのつ
れない心をもつ娘たちをいましめる歌だったんです。その魚
はもともと人間の娘だったのが、愛してくれた男と寝るのを
こぼんだために、冷たい魚に変えられたそうです。実にあわ
れな、そして実際にあった話ですがね。

『ヴェニスの商人』については“The process of Antonio’s end.”の一
節は第4幕第1場のアントーニオの台詞のものである。

ANTONIO

But little: I am arm'd and well prepared.

Give me your hand, Bassanio: fare you well!

Grieve not that I am fallen to this for you;

For herein Fortune shows herself more kind

Than is her custom: it is still her use
To let the wretched man outlive his wealth,
To view with hollow eye and wrinkled brow
An age of poverty; from which lingering penance
Of such misery doth she cut me off.
Commend me to your honourable wife:
Tell her the process of Antonio's end;
Say how I loved you, speak me fair in death;
And, when the tale is told, bid her be judge
Whether Bassanio had not once a love.
Repent but you that you shall lose your friend,
And he repents not that he pays your debt;
For if the Jew do cut but deep enough,
I'll pay it presently with all my heart.

(下線は筆者)

同じく該当箇所を小田島訳で紹介しておきたい。

アントニーオ 別にありません、十分に覚悟はできておりま
す。

お別れの握手だ、バツサニーオ、さようなら。
きみのためにこうなったからといって悲しんでくれるな、
これでも運命の女神は、いつもにくれればば
思いやりがあるほうだ。いちもなら、破産した
あわれな男をいつまでも生かしておいて、目はくぼみ、
額は皺だらけといったありさまで、貧困の苦しみを
老いの身になめさせる、そのいつまでも長引く
みじめな思いだけは、おれの場合許してくれたのだ。

きみの奥さんによろしく言ってくれ、アントーニオが
どのように最期を迎えたか、そしてバツサーニオを
どんなに愛していたか、ちゃんと話してほしい、
話がすんだら、奥さんに判断してもらいってくれ、
バツサーニオに心からの親友がいなかったどうか。
きみが友人を失うのを悲しんでくれさえすれば、
その友人はきみの負債を支払うのを悲しみはしない。
あのユダヤ人の刃が少しでもこの胸に深く刺されば、
そのぶんだけ喜んで胸の底から支払うことができるのだ。

なお、掲載号が 121 号のため 120 号、122 号との記事の継続性や関連性を認めることはできなかった。本文中にある *Nagasaki Gazette* の記述との関連性だけが指摘されているにすぎない。

3 *The Nagasaki Express* の位置づけ

日本シェイクスピア受容史を論じる際、*The Japan Punch* (1874) のチャールズ・ワグマン(Charles Wirgman, 1832-1891)のハムレットの独白は必ず取り上げられる。それは侍姿のハムレットのイラ挿絵があることが大きな原因かもしれない。また、横浜にゲーテ座があり、早くから外国人劇団によりシェイクスピア劇が上演されていたという背景もあるかもしれない。両誌のシェイクスピア言及に関する比較を簡単にしておきたい。

新聞名	<i>The Nagasaki Express</i>	<i>The Japan Punch</i>
発行年月	1872 年 5 月 4 日	1874 年 1 月
発行地	長崎	横浜
創刊者	フィロメノ・ブラガ	チャーブル・ワグマン
掲載作品	『冬物語』	『ハムレット』

- (3) 柳田泉『明治初期の翻訳文学』(松柏館書店、1935年2月)、
p.568
- (4) 大島田人「明治期に於けるシェークスピア」(『明治大学人文科学研究所紀要』通号3号、明治大学和泉校舎、1955年3月)、
p.98
- (5) 北根豊監修『日本初期新聞全集』(第36巻、ペリカン社、複製本、1992年6月)、p.199.
- (6) 西田長寿「ナガサキ・エクスプレス」(日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984年9月)、p.515.

キーワード：シェイクスピア、*The Nagasaki Express*、柳田泉、大島田人

地方改良運動が図書館選書論に与えた影響について

—特に井上友一に着目して—

新藤 透

1. はじめに

明治期に図書館設立数増加の契機になったのが、日露戦争後に内務省が主導した地方改良運動であることは間違いない(1)。地方改良運動は図書館設立を主目的とした運動ではないが、井上友一をはじめとするこの運動を推進した内務官僚は、かなり図書館に関心を抱いていたことは確かなようである。

本稿では、まず日本近代史と日本図書館史の領域の地方改良運動の代表的な先行研究の内容をまとめた上で、改めて内務省が地方改良運動で図書館建設を推進して、どのような「国民」を生み出したのか検討を行う。また、地方改良運動が図書館の選書論に与えた影響も合わせて検討をする。

2. 地方改良運動の先行研究

2.1 日本史学（日本近代史）

地方改良運動の研究は、主に日本史学の領域で行われており研究蓄積も多い。従って通説的な見解が記述されていると思われる日本史学の辞典類を確認したい。『国史大辞典』では次のように書かれている。

日露戦争後に、日本が帝国主義列強に伍していくための国力増進策の一環として、町村財政と生活习俗の改良をめざした国家官僚の試み。（中略）（一）（明治—引用者註）四十一年実施の義務教育年限延長が加重する町村財政難を解決するため、町村制実施以後も進展していなかった部落（旧村）共有林野の統合による町村基本財産の造成とそこからの収入による町村財政逼迫の緩和。（二）

『ヴェニス商人』

言語	英語	ローマ字訳
挿絵	なし	あり

創刊者のフィロメノ・ブラガはもともと印刷工であったのに対し、チャールズ・ワグマンは *The Illustrated London News* 社の特派員・挿絵画家としてアロー号事件(1856-1860)の取材のため中国を訪れ、その後は長崎へ訪れたジャーナリストである。*The Japan Punch* は挿絵の影響や横浜で発行されたという地の利を生かして注目を浴びた。単純な比較であるが、ブラガに比べ、ワグマンには文化的教養の背景が見て取れよう。発行物としては *The Nagasaki Express* は「地方紙としてぬきんでること」を強く意識するあまり、*Nagasaki Gazette* にライバル心を強く持っていたようだ。そのことはシェイクスピア言及箇所にも *Nagasaki Gazette* のくだりが出てくることからわかる。侍姿のハムレットの挿絵はインパクトが強く、さらに当時の横浜でのハムレット上演との関連からも *The Japan Punch* の方が注目を浴びることになるだろう。また、*The Nagasaki Express* が *Nagasaki Gazette* をかなりライバル視していたことはその本文中からも明らかであるが、鈴木雄雅監修『日本初期新聞全集』(別巻、2000)では *Nagasaki Gazette* は取扱いされていない。同様に日蘭学会編『洋学史事典』(1984)でも *The Nagasaki Express* の項目もあり、本文中に *Nagasaki Gazette* への言及はあるものの、項目としての取扱はない。⁽⁶⁾ *Nagasaki Gazette* についてはさらに調査を進め、シェイクスピアへの言及の可能性について探してみたい。

エピローグ

今回の調査では柳田泉『明治初期の翻訳文学』(1935)、大島田人

「明治期に於けるシェイクスピア」(1955)の内容の確認から、あらためて *The Nagasaki Express* にシェイクスピア言及の出所を確認した。そこにはライバル誌の *Nagasaki Gazette* の記事との関連からなぜ『冬物語』がここで取り上げられたのかは解明するには至らなかった。これには *Nagasaki Gazette* についても調査を要するが、現状では『日本初期新聞全集』にさえも収録されておらず、継続的な調査の必要がある。

The Nagasaki Express のシェイクスピア作品紹介は、いづれにせよ *The Japan Punch* の「侍ハムレット」(1874)以前の記述だけに受容史的には重視しなければならないが、その取り上げ方については大島田人「明治期に於けるシェイクスピア」(1955)で取り上げられたに過ぎず、受容史上、記載の事実以外には文学的、演劇的な影響はほとんど認められないということになりそうだ。しかし、長崎が江戸時代より日本においては西欧文化との窓口であったことを考えると、「長崎とシェイクスピア受容」という新しい視点も必要になるかもしれない。

翻訳テキスト

小田島雄志訳『冬物語』(シェイクスピア全集 14、白水社、1983年10月)

小田島雄志訳『ヴェニスの商人』(シェイクスピア全集 35、白水社、1983年10月)

注

(1) 鈴木雄雅「*The Nagasaki Express*」(鈴木雄雅監『日本初期新聞全集』別巻、ペリカン社、2000年2月)、p.110.

(2) Ditto.

- (3) 柳田泉『明治初期の翻訳文学』(松柏館書店、1935年2月)、
p.568
- (4) 大島田人「明治期に於けるシェークスピア」(『明治大学人文科学研究所紀要』通号3号、明治大学和泉校舎、1955年3月)、
p.98
- (5) 北根豊監修『日本初期新聞全集』(第36巻、ペリカン社、複製本、1992年6月)、p.199.
- (6) 西田長寿「ナガサキ・エクスプレス」(日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984年9月)、p.515.

キーワード：シェイクスピア、*The Nagasaki Express*、柳田泉、大島田人